

出雲国西部で出土した寺町廃寺跡同範・同紋瓦をめぐって

—飛鳥時代同範瓦と僧侶の活動—

出雲弥生の森博物館

館長 花谷 浩

1 はじめに

旧出雲国西部に寺町廃寺跡とよく似た軒丸瓦が分布することは、ちょうど70年前の1952年に梅原末治氏が指摘し、その後、1969年の松下正司氏の総合的研究によって備後北部と出雲西部に特徴的に分布する「水切り瓦」の様相が明らかとなりました。

出雲西部での水切り瓦出土遺跡を代表するのが、出雲市神門寺境内廃寺跡（かんどじけいだいはいじあと）です。神戸川右岸の微高地に立地するこの遺跡は、40年前に範囲確認の発掘調査がおこなわれ（1982-84年）、松下氏も備後との関係を再度強調された遺跡です。

斐伊川左岸の旧神門郡の神門寺境内廃寺跡が古くから著名であったのに対して、右岸に位置する旧出雲郡での水切り瓦は近年知られるようになったものです。出雲市斐川町での出雲郡家跡探索調査では、安来市教曇寺跡（きょうこうじあと）と同範の軒丸瓦とともに水切り瓦が出土しました。

これとは別に、出雲市斐川町直江南部の丘陵地帯（郡家跡関連遺跡群の東方約2km）において工業団地造成にともなう発掘調査が実施されました（1999-2003年）。この調査では、瓦窯跡1基が発見されるとともに、丸・平瓦、軒丸瓦、鴟尾などが出土しましたが、ほとんど未報告でした。その後、斐川町の出雲市への合併（2011年）ののち再度造成計画が進められることとなり、埋蔵文化財調査がなされ（2012-14年）、報告書も刊行されました（2016年）。この中で未報告であった三井Ⅱ遺跡の瓦窯跡出土瓦類について報告をおこないましたが、それより先、筆者は、三井Ⅱ遺跡出土軒丸瓦と寺町廃寺跡の軒丸瓦FIBとの同範を確認し報告しました（2010年）。その後、この同範関係について、妹尾周三氏や小林新平氏、日浦裕子氏らの論考が続くこととなったのです。

本報告では、神門寺境内廃寺跡の軒瓦と遺構、寺町廃寺跡と同範の三井Ⅱ遺跡の軒丸瓦と鴟尾を取り上げます。備後と出雲という遠距離間の同範瓦の背景には、弘濟禅師の関与を想定できるのではないかと考えていますが、それを傍証するものとして、三蔵法師・玄奘（げんじょう 600・602-664）に師事した渡唐僧・道昭（どうしょう 629-700）が創建した飛鳥寺東南隅の禅院（奈良県明日香村）の同範瓦が示す道昭の事績との関連を提示したいと思います。

2 出雲における寺町廃寺跡の同紋瓦と同範瓦

古代寺院の軒先を飾る瓦を「軒丸瓦」といい、仏を象徴する蓮の花（蓮華紋）が飾られています。この蓮華紋がよく似たものを「同紋（どうもん）瓦」といいます。この紋様を作る時、主に木でできた型（瓦範 がはん）を使います。お菓子の落雁の木型と同じようなものと思ってもらえばよいでしょう。同じ瓦範で作られた瓦を「同範（どうはん）瓦」と呼びます。

(1) 神門寺境内廃寺跡 （出雲市塩冶町）

浄土宗寺院の天応山神門寺の境内とその周辺が遺跡です。境内には『仮名手本忠臣蔵』で有名な塩谷判官高貞（えんやはんがんだかさだ）の墓とされる五輪塔があります。

この神門寺の庫裏の裏側（北側）には塔の心礎が残っており、周囲の調査成果によれば、基壇の一边が 11.4m の規模と推定され、三重塔が建っていたと考えられます。

神門寺境内廃寺跡からは、4 種類の軒丸瓦が出土します。寺町廃寺跡の F I B にそっくり（同範ではない 同紋瓦）の 1 型式と、中房（蓮の花の花托）周囲に珠紋を並べる 2 型式。この二つは「水切り瓦」で、出土数も多い瓦（1 型式が 7 割、2 型式が 2 割 5 分）です。寺町廃寺跡と違うのは、三日月形をした無紋の軒平瓦があることです。

これら軒丸瓦の出土分布を検討すると、塔跡の西方に 1 型式が集中し、さらにその北方で 2 型式がまとまっているようです。おそらく、塔跡の西に金堂跡が、その北に講堂跡があったのでしょう。このような伽藍（がらん）配置は、奈良県斑鳩の法起寺（ほうきじ）にちなんで「法起寺式」と呼びますが、これが寺町廃寺跡と共通します。瓦のデザインだけでなく、寺のデザインからも寺町廃寺跡との強いつながりがうかがえます。

(2) 三井Ⅱ遺跡 （出雲市斐川町）

出雲平野の東南部には低い丘陵がいくつも並び、その一つを横切って古代のハイウェイ「山陰道」（道幅 9m）が走っていたことが近年、確認され国史跡となりました。この古代山陰道の南の丘陵地にあるのが三井Ⅱ遺跡です。2000 年にここで発掘調査がおこなわれ、古代の窯跡が見つかりました。長さ 10m ほどと推定され、丘陵斜面にトンネル状の穴をあけた登り窯です。窯跡の下の方に不良品を捨てた場所（灰原）があり、大量の瓦と須恵器が出土しました。瓦には、丸瓦と平瓦のほか、軒丸瓦 1 種類と鴟尾（しび）と呼ばれる瓦屋根の大棟の飾りがありました。

軒丸瓦は、寺町廃寺跡の F I B と同じ瓦範から作られた同範瓦です。鴟尾は、胴部にキノコのような飾りを付けたもので、同じような鴟尾が三次市上山手廃寺跡から出土しています。

三井Ⅱ遺跡で瓦作りにいそしんだのは、大当瓦窯跡から瓦作り道具を携え、90km もの中国山地越えをしてきた瓦工人だったと推定できます。残念ながら、ここで作られた瓦がどこの寺で使われたのかは未だわかっていません。

3 飛鳥寺東南隅の禪院とその同範瓦の分布

三井Ⅱ遺跡に寺町廃寺跡 F I B の範型が持ち込まれたのは、この地に古代寺院を創建しようとした豪族が「三谷郡の大領の先祖」と繋がりを持っていたからでしょうか。読み方にもよりますが、「三谷寺」建立の事情を記す『日本霊異記』上巻第七縁によると、百濟僧弘濟（くだらそうぐさい）は他にも多くの伽藍建設に関わったようですから、三井Ⅱ遺跡での造瓦（そして造寺）も弘濟が関係したのではなかろうか、と憶測しています。

そう考える背景は、最初にも記した道昭の飛鳥寺東南隅の禪院と同範の瓦が示す分布状況です。禪院の軒丸瓦は、7世紀後半のものとしては変わっていて、蓮華紋を縁取る外縁がたいへん幅広になっています。当時の普通の蓮華紋だと断面が三角形になるので、とても特徴的です。

飛鳥寺は710年の平城京遷都にともない平城京左京に移転し元興寺（がんこうじ）となりましたが、禪院は本寺と離れ、右京に移転し「禪院寺」となりました。この移転先（右京四条一坊）の近くから同範瓦が見つかっています。

道昭は、禪院を建てたのち、畿内を周遊し各地で社会事業や土木事業をおこないます。大和盆地南部を東西に走る横大路の地鎮遺構（橿原市）にも同範瓦が使われ、天武天皇の都づくりに深く関わった高田氏の氏寺と目される高田廃寺跡（桜井市）からも同範瓦が出土しました。

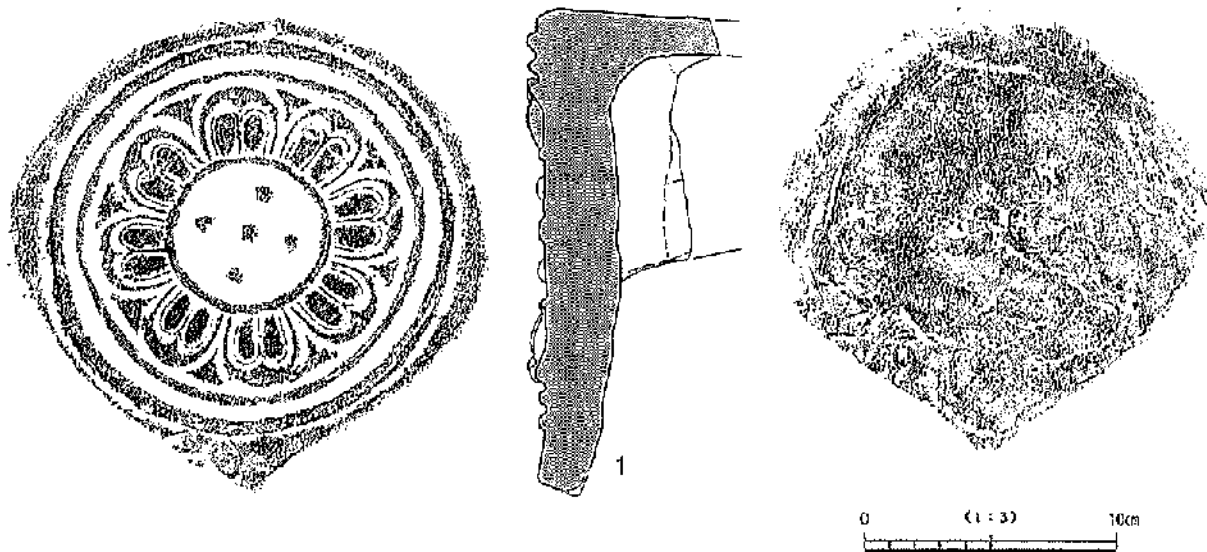
典型的なのが山崎廃寺跡（京都府大山崎町）です。民衆への仏教布教と各種社会事業、そして東大寺大仏造営に深く関わったことで有名な僧・行基（668－749）。彼は、淀川に山崎橋を架けますが、それは道昭が架橋した橋が朽ち果てていたからだ、と記録されています。行基は橋のたもとに山崎院を建てましたが、その遺跡が山崎廃寺跡です。そして、ここからも飛鳥寺禪院の同範瓦が出土しているのです。ほかの同範瓦出土遺跡も何らかの形で道昭の事績と結びつきをもっていると考えられます。

このように、飛鳥寺禪院の同範瓦は、畿内各地に足を延ばして各種の社会事業、土木事業をおこなった道昭の足跡をたどるかにように分布しています。

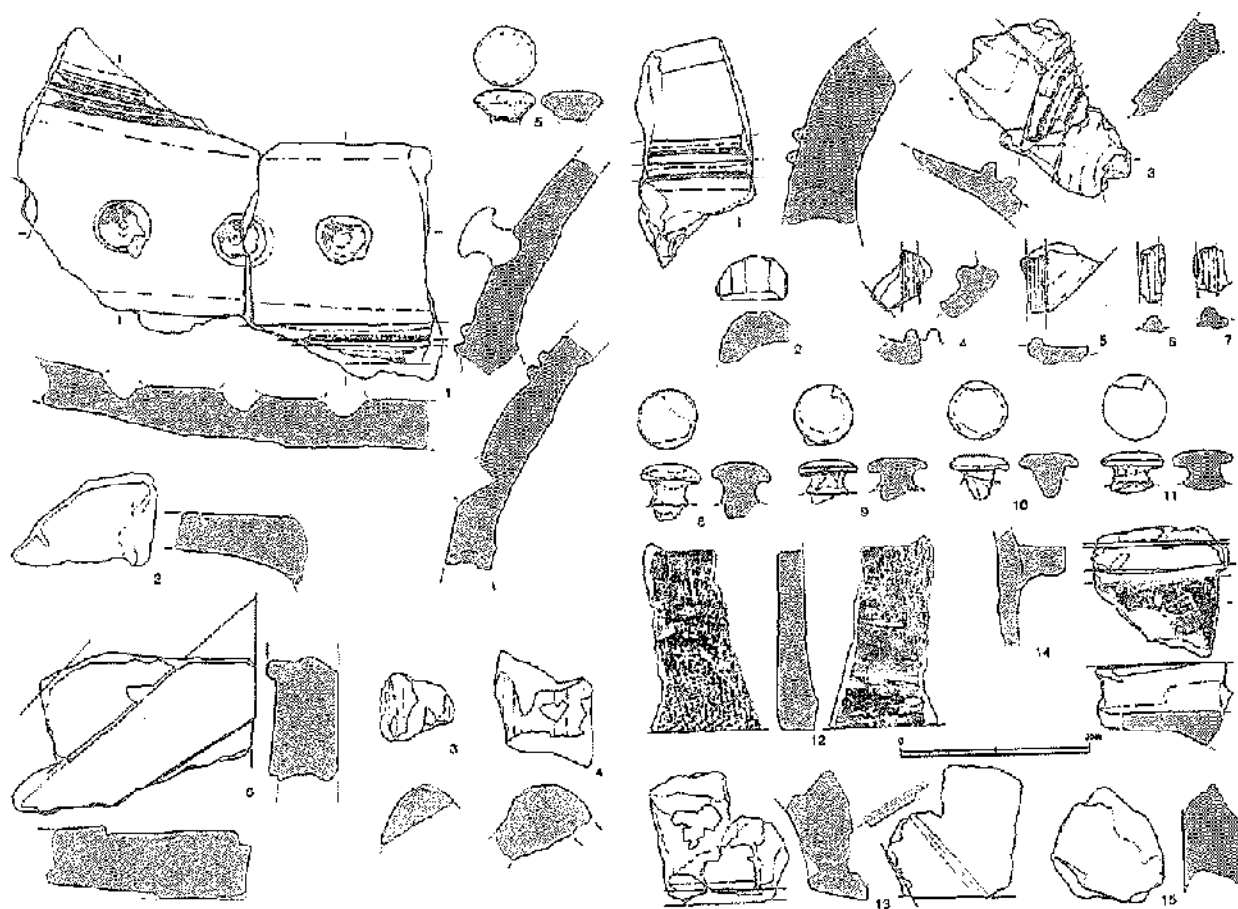
4 おわりに

出雲西部に分布する複弁の「水切り瓦」は古くから注目されてきましたが、そのなかには寺町廃寺跡の F I B 同範瓦が存在します。大当瓦窯跡で働いていた瓦工人が道具一式を抱えて出雲に足を運び、各種の瓦づくりに汗を流していたさまが目には浮かびます。瓦だけではありません。神門寺境内廃寺跡の伽藍配置が寺町廃寺跡と同じく法起寺式だとすると、建築設計士や大工さんも備後から来ていたのかもしれない。

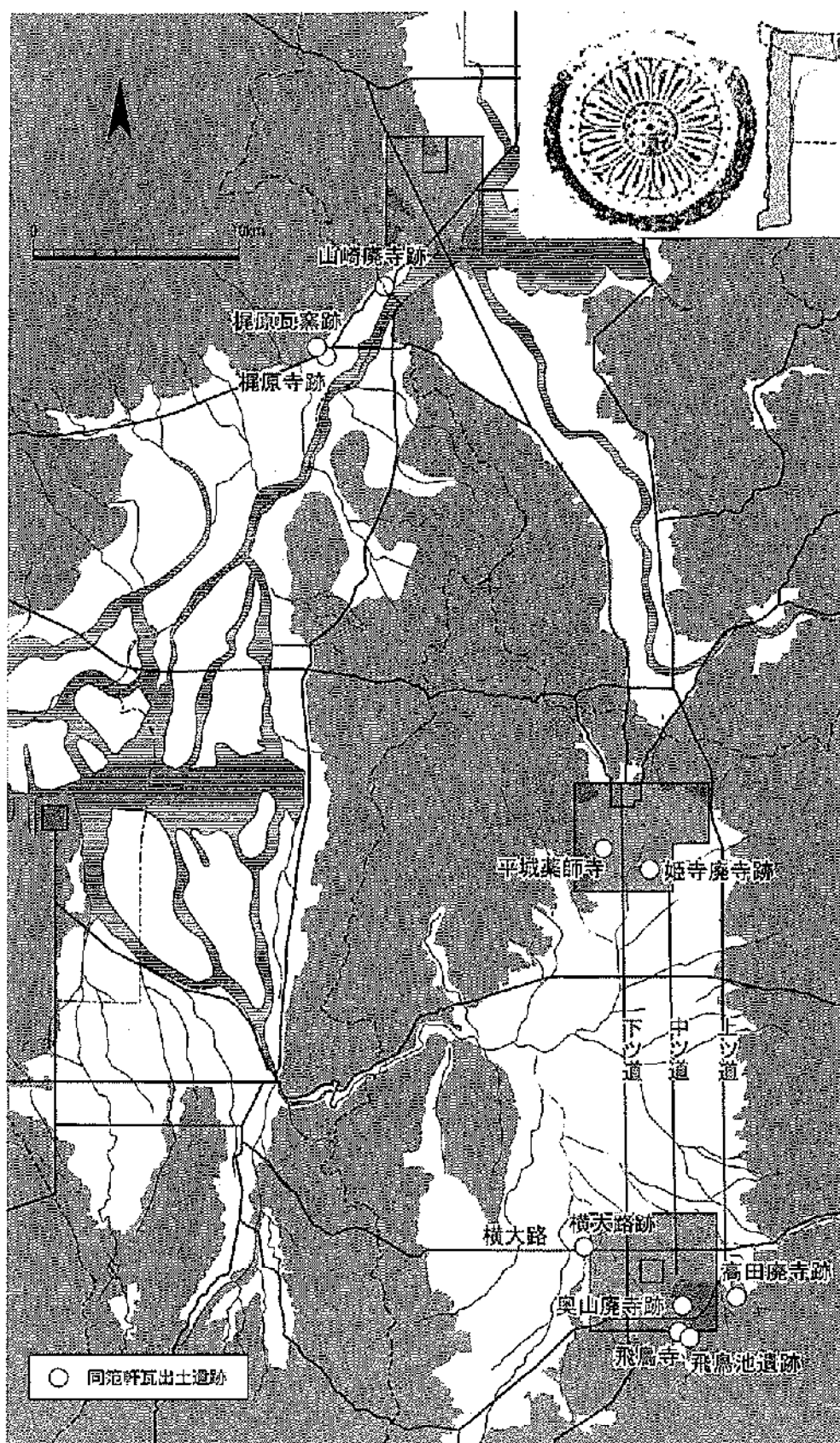
わが国最初の仏教伽藍・飛鳥寺を造営する時、経験も技術もなかったわが国では、百濟から「瓦博士」という瓦職人や「寺工（てらだくみ）」という建築家など各種技術者を招聘しました。飛鳥時代おわりの出雲西部では、これと同じように、瓦博士や寺工を、ここ三次の寺町廃寺跡に全面的に頼っていたと推測することができそうです。



三井Ⅱ遺跡 軒丸瓦 (1:3)



三井Ⅱ遺跡 鰯尾及びその他の瓦埴類 (1:8)



飛鳥寺・禪院同範瓦出土遺跡 (1 : 300,000)